雪裏清香（せつりせいこう）

ふるさとの風
～如月～

如月　ｋｉｓａｒａｇｉ

一、　寒さのために衣を重ねるところから、キサラギ・キヌサラギ（衣更着）の義。

―「さむくてさらにきぬをきれば」―『奥義抄』

二、　陽気が発達する時節であるところから、キサラキ（気更来）の義。

―「気更に来るの義、陽気の発達する時也。」―『和訓栞』

『和訓栞』は、我が国で初めて五十音順に並べられた国語辞典で、谷川士清（たにがわことすが）によってつくられた。
士清が生まれた津市に所在する結城神社は、「建武新政」の樹立に貢献した結城宗広公が祀られており、
二月から三月、境内がしだれ梅で埋め尽くされ圧巻である。

かぐわしい芳香をただよわせ、春の訪れを予感させる可憐な梅の花。

伊勢にも、梅が咲き誇る場所がある。御薗町新開地区の「臥龍梅公園」である。

臥龍梅は、龍が横たわる姿からその名がついたもので、全国各地に存在する。
御薗の臥龍梅は、ひとつの花に雌しべを多数もち、実を多く結ぶという珍しいもので、人が車座になって話をしているように見えることから、「座論梅」「八房の梅」とも呼ばれる。
現在、梅園の前には菅原神社が建てられており、菅原道真公の座像が祀られている。
道真はこよなく梅を愛した。
御薗の臥龍梅の由来は、『勢陽五鈴遺響』に神秘的な伝説として記されている。

―九州に左遷された道真は、側近・今村刑部師親に愛する梅を託し、伊勢神宮に代参させた。
師親が疲れて一眠りした夢に白髪の老翁が現れ、「梅を植えるのはこの地に」と諭すお告げによって植樹した。―

中国には梅の香りが、学問が栄えるときによりかぐわしくなるという故事があり、梅の花は別名「好文木（こうぶんぼく）」と呼ばれていた。若き日の道真の学び舎にも梅があり、その芳香は自らの精神を大きく養ったと道真は自著『菅家文草（かんけぶんそう）』に記している。
道真が左遷先の九州に向かって出発するとき、家の庭の梅花に向かって詠んだ歌はあまりにも有名である。

東風吹かば　匂ひおこせよ　梅の花　あるじなしとて　春な忘れそ

- 御薗村誌　（御薗村誌編纂室／編纂　御薗村　Ｌ243／ミ）
- 勢陽雑記　（山中為綱／著　三重県郷土資料刊行会　Ｌ290／ヤ）
- 勢陽五鈴遺響　５　（安岡親毅／著　三重県郷土資料刊行会　Ｌ290／ヤ／5）
- 三重県植物誌　上巻　（伊藤武夫／著　三重県植物誌発行所　Ｌ472／イ／1）